



取材・文／端井山紀子  
撮影／浜崎 祐  
協力・有限会社 フェルタ・デル・ソル  
新神戸オリエンタル劇場

子供だからね、  
僕はどっか。  
もうこのまま無鉄砲で行こう、と。

# 宮本亜門

宮本亜門という1つの才能は、エンターテインメントの快楽を信じさせる。  
それは、多くの人にとっての有効なフィルターでもある。



この人は特別な人だ。人にそう思わせること自体が、才能である。それは、その才能が本物かどうかという極めて曖昧な事実以前の、もつと決定的な才能の在り方だ。当然努力の域ではなく、そう思わせることが、もうすでにその人の才能の1つということである。

どこにいても、必ず注目を集める。みんなが漠然と次に欲しいと思っていることと、今体現しているものがく自然に一致している。自分の中の声に従えば従うほど、たくさんの人を惹きつける。宮本亜門氏は、粉れもなくそんな人の1人である。

「始めに『アイ・ガット・マーマン』やった時に、本当は自分はこんなのが見たいんだと思っているものをやったら、偶然みんなも見たいと思っていたものだったので驚いた。」

つまりは、そういうことだ。

人をとらえるはつきりとした目で声で、表情豊かに彼は話す。

「でも、これから又台詞とは限らないしね。正直言うと僕は本当にお客さんのため、というより、いかに自分が興奮出来る、正直に自分を出せるかというところでしか出来ないから。特に今回のような舞台は、嫌いな人は嫌い、好きな人はとにかく好きと、もう大賛否両論になったしね。」

今回の舞台とは、橋本治氏の脚本、横尾忠則氏の美術、ホッピー神山氏の音楽、さらに宮本氏の演出と、その異色ぶりで話題となったサイケ歌舞伎、『月食』である。何のために生きるかを探るために生きる

バラモン階級の青年が、もがき苦しむ自分探しの旅、という基本的なストーリーはあつたものの、このような異才揃いであつて、一筋縄ではいかない仕上がり舞台となつたのは、容易に想像がつく。エキセントリックなロングのウィックに女物のコスチュームで装ったホッピー神山が、享乐的な羽セックスを振り上げ指揮を執れば、ダンスとセックスを芝居に、演歌かと思えばロックに、ヨードルが響いたと思つたら歌舞伎風に見栄をきつている、という具合に異素材なものが変則的にめまぐるしく入れ変わる。だが、そういう表現の違いを見ているうちに、いつのまにか1つの流れの中に入っていく。「表現の違いを気にする人にとっては、許せないものであるかも。」

チケットが2時間でソールドアウトしたという関西公演の初日、その日いくつかあった取材のおそらく1番最後であつただろう。開幕を2時間後に控えた劇場2F席のロビーで、彼に会えた。

「まず、桃尻娘を眺んで以来、こういう人とはぜひ1度関わってみたいと思つてた橋本さん、あの頭の柔らかさや次々と時代を切り開いていく冒険野郎のようなところのファンだった横尾さん、CDを聞いてずっと興味を持っていたホッピーさんに僕がラフコールしたら、それで皆さん快くすんなり引き受けてくれて良かったです。本当にそれだけで、引き受けてくれた後で、僕の方がどうしようかと思つたくらい。」

用意された足の長いイスに腰を降ろし、1つ話の話を的確で詳しい皆さんの言葉で話す。ところで、世を騒がす異才4人の

## 表現の違いを 気にする人にとつては、 許せないものであるかも。

顔合わせがそれで表現とは。まったく宮本氏のやりたいことに神様が味方していると思えな。以前一緒に仕事したとすから「まったくなし」というのだから。「本当の初顔合わせ。それが、また楽しいんだよ。それより」

その上、とてもよく気のまわる人でもある。「立つてインタヴューする？ ねえ、イスも一つ持ってきてよ。」

初日の開幕前とあつて、舞台では最終のセッティングが行なわれていた。当然のことだが、インタヴュー前の先程も宮本氏は舞台上に降り、指示を出していた。彼の表情からなんと緊張の色を探し出そうとしたが、それはうまくいかなかった。

そんな今回の舞台は本当に4人4様、非常に強い個性のせめぎ合い、という印象である。だが逆に彼らは彼らでどこかとても似ているようにも思えた。それがアクの強い彼らをベースで結びつけている、と。

「そう、アカデミック、というが、それぞれが基礎を知っているということだよ。演技にしろ音楽にしろ、あらゆるもののベイスをよく知っていて、その上で異端児であるということ。それをすべて分かった上で遊べる人間だということだよ。それは共通し

ている。」

違つていても似ている。そうそう、確かにそうだと彼はうなずき、それから嬉しそうに顔をこぼす。

「それでよく、今回はどんな舞台？ って聞かれると、アカデミックなワンコ、と言わしてもらつてるんだけど。」

「つまり、アカデミックなことを知っている人達が遊んでしまった舞台だということ。そういう意味では、みんなとても勇気があつるし、大胆なんだよね。」

確かにそれらなくして遊んだ舞台など下品なだけだろう。それは、エンターテイメントに関わる人間はどこか突出してないわけではないのだ、という彼の持論にもかなるものである。そんな舞台の企画段階で、基本的なストーリーを考えたのはやはり宮本氏だったという。

「もともと僕がヘルマン・ヘッセの『シッダールター』がすごく好きだったというのがあつて。それでエイス問題などが蔓延している今のこの時代に生と死について考えた時、悟りであるとか、輪廻転生であるとかをテーマにしたものが作りたい、と。これ





# 宮本亜門

The **SPECIAL** Real Face **INTERVIEW**



**宮本亜門**  
出演者、演出師を経て、2年間ロンドン、ニューヨークに留学。帰国後の1987年にオリジナルミュージカル「アイ・ガット・マーマン」でデビュー。ミュージカルのみならず、ストレートプレイ、オペラなど、現在最も注目される演出家として活躍の場を広げている。04年唯一の舞台演出作品となるサイケ歌舞伎「月食」を新神戸オリエンタル劇場にて上演。

インメントを分かりやすく見せる宮本亜門というフィルターのせいだろうか。この8年での変化について聞くと彼はあっさりこう答えた。

「子供だからね、僕はどっか。ものを作る時は本当に楽しんで作りたい、っていうところでは何も変わってないんじゃないかな。」

けれど自分の中の方向性のようなものの変化はあったのでは？

「確かに前はフロードウェイ・ミュージカルのなものが一番好きで、それをやっていたと思うってただけど。いろんな人に出会えるようになって、いろんな考え方や表現を知ること、僕自身の幅も広がった、というか。昔だったら、ミケランジェロでも一番いいのはやっぱりダビデ像だと思っていたのが、最近は他のもつと完成されてない作品の方が心に染みたりする。そういう完成が目的でない、武骨な人間らしいものの良さって、もつとあるんだろなって、少し、分かってきた。」

彼自身のキャパシティが変化してきているということだろうか。だが、そのベースには「自分にうそをつかず、やりたいこと

を正直にやる。」という彼なりのテーマがいつもある。

「毎回、全力投球でぶつかっていく楽しさは何物にも代えがたいからね。自分に才能があるかどうかなんて、かまわず今までやってきたし、もうこのまま無鉄砲で行こう。今年はずもう舞台やらないしね。」

宮本氏は、今年入ってきていた舞台の話をもんな断り、去年の夏には今年の舞台はこれ一本と決めていたという。

「休むっていったらみんな反対するかなと思ったら、すぐOKが出て。じゃ、休みましょうってことに。」

充電ということだろうか。笑って彼はそれを打ち消した。

「充電出来ない性なんで。僕は、もうたらたらへなへな遊んで会いたい人に会ったりとか、行きたいところへ行ったりとか。自分の好きに時間を使うってことを、もう一回してみたい。この間も2日間奈良に行っていたりとか。何しに、仏像を見たいですよ。昔っから好きなんだよ。僕、中学、高校と仏像マニアだったんだから。「見仏記」読んだ？面白かったよねえ。そう、み

うらさんと同じ。」

意外な趣味だが、それで京都にくること多いという。

「京都は行きますよ。必ず行くのはやっぱり三十三間堂。今さらながら行くね。必ず1回は行かないと気が済まない。でも街はだめ。行くんだけど案外いつも、ほろほろてまずいっていう店が多いんだよね（笑）。京都っていい店は分りにくくなってるってことはない？」

スルドイ指摘である。

「でも、これお世辞じゃないんだけど、僕はどうも関西人に合うみたいだね。東京だと、どうしてここで笑うんだっていうところて笑ったりとかして、わかんないんだよね。こつちに来ると、あつやつぱりこつつまんねえよな、とかあつやつぱりこつ面白いやねというのが分かりやすいね。はっきりにしているというか。」

キャパシティの広がりについては、最近彼は生まれて初めて、世の中で一番嫌っていたというカラオケ・ボックスに行ったばかりだという。

「生まれて初めて。あんな卑猥なところだと思わなかった（笑）。」

で、歌は何を？

「鳥唄とか（爆笑）。」

笑いながら三浦大輔をハンバンたたく。「いや、去年レコード大賞の司会させてもらった時、歌謡曲の勉強させられたんだよ。そのうち、口つまんでる自分がいたという。」

もちろん、これは些細な一例に過ぎないのだが。

だが、それに伴うように彼の仕事は新たな広がりを見せ始めている。絵を書き始め、作詞を手掛け、今度NHKではレギュラー番組が決まっているという。ミュージカル、演出家という枠にこたわらず彼は今、これまでになく多くのベクトルを持ち始めている。考えてみれば、こんな風に彼が多面化していくのは当然といえは当然のことである。エンターテイメントの快楽に魅せられた彼という子供は、退屈な現実と触れられて、いつも新しく楽しい遊びを探し続けているからである。